

氏 名 (本籍)	あ べ ひろ のり 阿 部 宏 徳 (三 重 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 2454 号		
学位授与年月日	平成 21 年 9 月 30 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	ロールシャッハ・テストの把握型システムに関する一考察 －色彩領域に対する反応形式に基づいた分類法の提案		
主 査	筑波大学教授	医学博士	小 川 俊 樹
副 査	筑波大学教授	医学博士	中 谷 陽 二
副 査	筑波大学教授	博士 (体育科学)	中 込 四 郎
副 査	筑波大学講師	博士 (学術)	望 月 聡

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本論文は、従来ともすれば見落とされてきたロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）図版上に存在する色彩（本論では赤・青などだけでなく、白黒も含む）を把握型の分類に取り入れて、把握型システムを再構築しようと意図したものである。

まず、ロ・テストがどのような歴史を経て発展してきたかについて文献考察がおこなわれ、現在の把握型やロ・テストが抱える問題点が議論された。そして、現在の把握型では反応分類規準として頻度が大きな存在感を持っており、視知覚にとって最も重要な要素である色彩やその領域の用い方に対する視点の欠如やインクプロットよりも外側の領域に対する注意や反応を捉える観点が不十分であるという問題点が提起された。その結果、色彩領域への注意やインクプロット外に対する注意や関心に立脚した把握型の新たな分類法について実験をおこなった。

(対象と方法)

大学生 104 名（男性 38 名・女性 66 名、年齢平均 20.0 歳（SD = 1.3））が対象・協力者として調査に参加した。協力者には調査前に書面・口頭で調査に関する説明が行われ、同意とそのサインが求められた。そして、調査終了後には謝礼が支払われた。調査順序は最初にロ・テスト、続いて質問紙・作業検査の順で行われた。本論文に含まれる各研究の協力者はこの 104 名かその一部である。

(結果)

目的での議論を踏まえ、これまでの把握型システムが持つ反応の分類基準とは異なる反応の質的側面に注目した新しい分類方法が検討された。その中で、ロ・テスト研究では一般的に外向性と関連があると見なされてきた WsumC（色彩反応を用いた指標）よりも色彩を重視した把握型変数の方が外向性をより上手く捉えられることが実証的に示された。また、他者よりも自己の枠組みを重視する協力者群はその他の群よりも色彩領域の一部を切断する反応（Cut D）を有意により多く産出しやすいことが確かめられた。更に、色彩領域の切断後に、他の反応を切断されて余った領域に与える反応は視覚的ワーキングメモリ効率に対して、

これまで多くの研究で（動作性）知能との関連が実証的に確かめられてきた「組織化された良質な全体反応」と同等の説明効率を持つことが確かめられたり、インクプロット外の空白領域を用いた部分反応と熟考性との関連が示される等、計8つの研究から、本論文で提唱された把握型の分類システムがこれまでの方法よりも効率的にか、あるいはそれと同等以上に協力者の特徴を上手く捉えられる可能性が示唆された。

以上の結果を受けて、新しい分類方法をまとめ、あるいは矛盾しないように組み合わせて、新しい把握型システムが作成された。また、各分類・反応がどのような過程によって産出されるかの考察がなされ、この新しい把握型システムはMAC（Manner of Approach on Color areas）と名付けられた。

続いて、MACの有効性と可能性について検討するために、MAC変数の特徴がより詳細に調べられた。まず、新しく作られたMACシステムが持つ変数が時間的にどれくらい安定しているかという再検査信頼性に関して調査がなされた結果、1回の検査で比較的多く産出される変数・反応ほど再検査相関が高く、その値は他の人格検査と比べて遜色のないものであることが示された。続いて、ここまでの研究で用いられた尺度・外的基準のすべてを改めて用いて、より良い変数の組み合わせを検討し、満足のいく結果を得た。

（考察）

MACはExner法など既存の把握型システムと同等かそれ以上の有効性を持っていることや、把握型だけでなく反応決定因などのロ・テストの他分野も含めての包括的検討を行うことができるという可能性などが提示された。その一方で、仮説に関して必ずしも十分な検討がなされたわけではないことや発達の視点など理論的検討がまだまだ不十分であること等の問題点がとりあげられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

ロールシャッハ・テストは世界中で最もよく用いられている心理検査であり、その分類システムに関していくつかのスコアリングシステムが提唱されている。本研究は、従来からの把握型システムを緻密に比較検討した上で、これまでの把握型システムで見逃されていた、色彩という知覚素材を考慮に入れた把握型（MAC）を提唱した。そして、この新しい把握型の分類の妥当性や信頼性について、実験研究を行っている。色彩という知覚要素から反応形成に係る把握型进行分类するという視点は斬新であり、その検証手続きも妥当で、高く評価できる。しかしながら、ロールシャッハ・テストが本来心理臨床の場でその効力を発揮していることを考えると、この新しい把握型の臨床知見を得ておらず、基礎的研究としての評価とは別に、臨床的有用性という点では今後の課題を残している。

著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。